

氏 名	やま さきはやし 山 崎(林) のぞみ
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 324 号
学位授与の日付	平 成 17 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	Patterns and Functions of Unspecific Nominal Phrases in English: From Lexis to Discourse (英語における抽象名詞句のパターンと機能——語彙から談話へ——)
論文調査委員	(主 査) 助教授 家 入 葉 子 教 授 宮 内 弘 助教授 廣 田 篤 彦

論 文 内 容 の 要 旨

序章および第1章

本研究は、issue, problem, argument のような抽象名詞を談話機能の観点から調査し、その性質を明らかにする。issue, problem, argument によって代表されるような抽象名詞は、それ自体では意味するところに具体性がなく、どのような issue であるのか、どのような problem であるのか、どのような argument であるのか、をコンテキストにより決定しなければならない。その具体的な内容は、多くの場合に、名詞に先行するかたちで談話内に示されている。たとえば、

The critics, and there are many, will still claim Paula should have stuck with dancing or cheer-leading, and she must release stronger and more consistent records before that argument will subside.

という文には、that argument という抽象名詞が用いられているが、その意味するところは、文の前半に具体的に示されている批評家たちの主張 (The critics から cheer-leading まで) である。先行研究では、この種の抽象名詞に対して、meta-linguistic nouns, unspecific nouns, abstract nouns, general nouns, labels などさまざまなタームを使用してきた。本研究は、Francis (1994) に従い、この種の抽象名詞をラベル (label) と呼び、その具体的な内容を言語的先行詞 (lexical realization) と呼ぶことにする。

本研究の目的は、以下の4点である。(1)この種の抽象名詞、すなわちラベルが現れるパターンを明らかにすること、(2)ラベルとそのほかの談話的機能をもつ表現との関係を明らかにすること、(3)書き言葉と話し言葉との間でラベルの使用について違いがみられるかどうかを明らかにすること、(4)自然の話し言葉においてラベルがどのような役割を果たしているかを明らかにすること。以上の目的のために、一億語のイギリス英語コーパスである BNC を使用し、さらに必要に応じて、新聞等の言語資料の調査を行った。研究を進めるにあたっては、コーパス言語学の手法を用いた。

第2章

Francis (1994) も述べるように、ラベルの完全なリストを作成することは不可能である。したがって、ラベルの生起する環境を具体的に調査することから始めることにしたい。ところが実際には、ラベルの生起する環境を明らかにすることも容易ではない。なぜなら、そのためには具体的にどのようなラベルが存在するのかを明らかにしなければならないからである。そこで本研究では、直観を利用しながら、あるいは先行研究を利用しながら、idea, factor, question, breakthrough などの抽象名詞をできるだけ多く列挙し、コーパスを利用してその名詞が起こる環境を調査することで、ラベルが使用されるパターンを抽出する試みを行った。その結果、第2章にあげた(A)から(M)までの13のパターンでラベルが起こりやすいことが明らかになった。たとえば、(M)は、ラベル+連結の動詞+just beginning のパターンであり、具体的には、Clearly *our troubles are just beginning* のような例が、それにあたる。この場合の *our troubles* がラベルであり、その意味する内容は、先行する部分に lexical realization として表れている。ラベルの起こる環境は、おおむね第2章に示す13のパターンに集約

できるが、のちに話し言葉の分析のところで、新たなパターン(N)が明らかになるので、実際には、本研究の中で明らかにしたパターンは14種類となる。

第3章

第3章以降では、これまでに明らかになったラベルとその生起パターンに基づいて、談話内におけるラベルの働きを具体的に論じていく。まず、第3章で扱うのは、ラベルの持つ cohesion の働きと evaluation の働きの関係である。ラベルにはこの2つの役割がある。たとえば、problem というラベルは、すでに談話内に示された problem の意味する具体的な内容、すなわち lexical realization を受けて談話を進展させるという意味において cohesion の役割を果たしているが、一方で、その lexical realization の内容が problem であるという判断を行っているという意味において、話者の evaluation を示しているともいえる。他の話者なら、problem ではなく、fact という名詞を用いたかもしれない。逆に fact ではなく problem を使用したということが、すでに evaluation となっているのである。この cohesion と evaluation の働きのどちらが強いかを明らかにするために、change, shift, failure, mistake の4つのラベルの起こる環境を調べたところ、ラベルの種類によって cohesion と evaluation の関係に明確な違いがあることが明らかになった。4つのラベルの中でも、failure, mistake の二つはすでに否定的なニュアンスを含んでおり、evaluation が働いていることが予測できる一方で、change と shift はより中立であると考えることが可能である。実際に本章では、この違いを両者の起こる環境の違いによって証明することができた。文を情報の流れの観点から、そのトピックを示す theme と、それを受けてコメントする rheme に分けた場合に、cohesion の働きが強い theme の位置には change や shift が、evaluation の働きが強い rheme の位置には failure や mistake が起こる傾向があることが明らかになった。中でも、もっとも evaluation の働きが強いのは、mistake である。

また、興味深いのは、ラベルが cohesion の働きをしているか evaluation の働きをしているかにより、ラベルに付着する形容詞の振る舞いが異なることである。change や shift のような中立性が高く evaluation の性質が低いラベルが、文中の rheme の位置、すなわち evaluation の働きの強い位置に現れたときには、形容詞のような修飾語句がついていることが多い。これは、change や shift がそれ自体では、十分に evaluation の機能をもっていないことと関連しているであろう。一方、ラベル自体が強い evaluation の働きをもっている failure や mistake では、evaluation の働きが強い rheme の位置に現れても、形容語句をとまなうことなく、単独で 사용되는ことが多い。

第4章

第4章では、本のレビュー、芝居のレビュー、ニュース報道の言語資料を用いて、書き言葉におけるラベルを、談話の観点から調査した。レビューの場合には、本や芝居の具体的な内容の説明のあとにラベルが挿入される。ここでラベルが一旦 evaluation の働きをし、このラベルを踏まえて、本や芝居のレビューが展開するという情報の流れが特徴的である。一方、ニュース報道は、リードと呼ばれる冒頭の段落と、ボディと呼ばれる本文から構成されており、ラベルは両者をつなぐピボットの役割を果たしている。興味深いのは、リードの部分が過去形になっているか現在完了形になっているかにより、ラベルの果たす役割が異なる点である。冒頭の段落の時制、すなわちリードの時制が過去形の場合には、すでにリードの部分からニュースの報道が始まっており、ラベルはその内容を受けて、本文につなぐ役割を果たす。一方、リードの部分が現在完了形になっている場合には、リードではなく、そのあとに来るラベルから報道の内容が始まる。この場合には、現在完了形で書かれたリードの部分は、独立的に、報道記事全体をまとめる働きをしている。

第5章

本章では、話し言葉におけるラベルを、書き言葉におけるラベルとの比較によって分析する。一般に、ラベルは書き言葉の方に多いと考えられていることを踏まえ、problem というラベルに焦点をあて、調査をおこなった。その結果、ラベルとしての problem の出現頻度そのものについては、話し言葉と書き言葉の間に大きな違いは見られなかったものの、文頭、すなわち文の theme の位置に限ってみると、明らかに書き言葉における頻度が高いことが明らかになった。また、話し言葉の中でも、「教育」「ビジネス」のようにジャンルを特定して集めた言語資料(BNCのcontext-governed section)では、

そうでない言語資料に比べて、文頭に起こる problem の頻度が高い。話し言葉であっても、書き言葉に近い性質を備えているのであろう。文頭におけるラベルとしての problem の頻度がもっとも低いのは、自由な会話の場合である。以上の傾向は、話し言葉においては書き言葉に比べて代名詞が多用される、という事実からも説明することができる。文頭はもともと代名詞の生じしやすい位置である。したがってこの位置におけるラベルの使用が、話し言葉では一般的でないというのは、代名詞の多用と関係しているのであろう。本章では、さらに議論を進めて、それでは話し言葉における problem がどのような構文に起こっているのかを、さらに分析した。その結果、ラベルとしての problem の例のほとんどが、… have this problem, … have that problem の構文で起こっていることがわかった。このパターンは非常に頻繁であるので、パターン(N)として、第2章の13のパターンに追加することとした。

第6章

本章では、話し言葉に特徴的な that's+ラベルの構文を分析する。この構文は、談話における先行内容を要約したりパラフレーズする役割、すなわち formulate する働きをしているので、ここではこの構文全体を formulation と呼ぶことにする。具体的に例文のコンテキストを分析した結果、formulation のあとに because, I mean などを使うことにより、発話を正当化しようとする傾向が見られたり、anyway, but などを使用して譲歩する姿勢が見られるなどの特徴が観察できた。また、この種の formulation が well や I mean などのいわゆる談話標識 (discourse marker) に後続する傾向がみられるのも、談話における特徴のひとつである。この場合も具体的に例文を調査したところ、Well, that's … というパターンでは、formulation にあらわれる名詞、すなわちラベルとしては problem, trouble などの否定的な性質のものが多くことが明らかになった。また、I mean, that's … は、やはりコンテキストの調査から、話者自身の発話の内容をモニターする働きをしていることがわかった。

以上のように、本論文では、これまであまり調査が進められてこなかった抽象名詞に着目し、語彙研究のレベルを超えて、談話内での働きという観点から分析を行った。本文中でラベルと呼んだこの種の抽象名詞は、話し言葉においても、これまでの研究で考えられてきた以上に観察することが可能であり、話し言葉、書き言葉の両面において、談話における重要な機能を果たしていることが明らかになった。

論文審査の結果の要旨

本研究は、issue, problem, argument などの抽象名詞が、すでに述べられた内容を受ける代名詞的な役割を果たすことに着目し、その働きを具体的な言語資料に基づいて、談話の枠組みの中で調査したものである。この種の名詞は、これまでの研究で metalinguistic nouns, unspecific nouns, abstract nouns などの異なるタームで呼ばれてきたが、以下では、本論文の記述に従って、「ラベル」(label) と呼ぶことにする。まず第2章において、ラベルの起こるパターンを詳細に調査し、そのパターンに基づいて、第3章以降の議論が進められる。ラベルに前述の内容を受けて談話を発展させる cohesion の働きと、前述の内容に対する判断を下す evaluation の働きがあることを指摘する第3章は、この2つの働きがラベルの種類によって異なることを明らかにしている。さらに第4章では書き言葉におけるラベルの使用、第5章と第6章では話し言葉におけるラベルの使用に焦点を置き、それぞれ談話の展開にラベルが重要な機能を果たしていることを詳細に記述している。

本論文のもっとも重要な意義は、一億語のコーパスを利用することにより、特定のカテゴリーの語彙研究を談話分析と関連づけることに成功していることである。このことにより談話分析の分野においても、コーパス言語学の分野においても、新たな展開の可能性が開かれたといってもよい。談話分析においては、これまでも、issue, problem, argument などの抽象名詞が、前述の内容を受ける代名詞的な機能を持っていることに着目した研究は多いが、そのほとんどは、具体的な例文をあげて、それに説明を加えることに終始しており、一般性を導き出すことに成功しているものは少ない。その主な原因は、調査する言語資料が不足していたこと、そして名詞のような、いわゆる「開いた」カテゴリーでは、その該当例をすべて列挙することができないことによるといえよう。本研究は、ラベルをすべて挙げるのが不可能であることをむしろ積極

的に認めた上で、ラベルの生起する環境を調査することに力点を置いている。調査したラベルの数が限られているにもかかわらず談話におけるラベルの働きを特徴づけることに成功しているのは、この点によるものと考えてよい。

また、語彙研究と談話分析の関連づけの功績は、コーパス言語学の観点からも重要である。従来、コーパス言語学は、語彙研究をもっとも得意な分野のひとつとし、一方で、談話分析はコーパス言語学がもっとも苦手とする分野のひとつであった。語彙を手がかりにしてコーパスを他分野の研究に利用する応用的な手法は、たとえば統語研究などで、少しずつ試みられている程度というのが現状である。しかし、本研究は、文レベルの分析を超えて、談話のレベルにまで語彙の調査を発展させることが可能であることを、具体的な形で示したといえることができる。特に注目すべきは、第3章でラベルの二つの働き、すなわち cohesion と evaluation の関係をコーパス言語学の手法を用いて証明したところである。change, shift, failure, mistake の4つのラベルの性質の違いが、文中での位置、付随する形容詞の性質の違いなどとの関連で明確に示されている。

次に、話し言葉における当該現象の研究そのものを、本論文が進展させた点を指摘したい。issue, problem, argument などの抽象名詞のもつ機能に着目した研究自体はこれまでも多い。しかし、そのほとんどが書き言葉における当該名詞の研究であり、この現象が書き言葉に特有のものであるとさえ考えられてきた感がないとはいえない。一方、本研究は、書き言葉と話し言葉の両方の資料を含むイギリス英語のコーパス、BNC を利用することにより、両者におけるラベルの振る舞いの違いを明らかにすることに成功している。たしかに、文頭に現れるラベルに限ってみると、書き言葉の方に頻出する傾向が見られるが、話し言葉においても、… have this problem, … have that problem のような決まったパターンにおいてラベルが起こる傾向が見られることや、well や I mean などの談話標識 (discourse marker) に後続するラベルが発話を正当化したり、モニターするなどの役割を担っていることなどが、具体的に示されている。

以上のように、本研究は、申請者が「ラベル」と呼ぶ、一連の抽象名詞の振る舞いを分析することを通して、語彙研究と談話分析を相互に関連づけることを可能にしたことで、当該分野のみならず関連分野においても重要な貢献をするものである。ただし、望まれる点がないわけではない。たとえば、第2章で名詞や動詞のような内容を持つ語と接続詞のような機能語との連続性を論じる部分では、文法化理論への言及が不可欠であると思われるが、その配慮が十分なされていない。また、調査する語彙の選択を直観に任せすぎているために、資料にやや偏りがあると考えられるところがある。さらに、談話標識とラベルの関係を論じた第6章では、談話標識自体の特徴が初めにおさえられていないために、談話標識の問題を論じているのか、ラベルの問題を論じているのか、焦点が定まらなくなっている。しかし、これらの点は、むしろ今後の研究の発展を期待させるものと解釈することが可能であり、論文の価値を損なうものではない。

このように、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認めることができる。2005年3月23日、審査員3名が論文の内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。